

第5回新鋭俳句賞

準賞

「大樹」三十句

金澤諒和

大樹

落第の子に珈琲のただ熱し
少年のクラブは素手ぞ風光る
一つづつ椅子を残して卒業す
話し掛けたくなる空や半仙戯
入学児まづ早起きを褒めらるる
勾玉に水の手触り春の月
遠足の校舎一日眠りたる
子の拳立夏の窓を叩きけり
薫風や額集めて描く地図
水面暮れ水底暮れて初螢
滴りの他は時なき伽藍かな
父の日の父のペン先乾かざる
青梅雨の校舎大樹の香を放つ
帰省子の靴を真中の三和土かな
十薬に夜の雨脚の整ひぬ
大樟の蔭の中なる晩夏かな
吾が頬を撫づる風へと門火焚く
革靴に歩く校庭終戦日
少年に四股名はあらず草相撲
アンカーに競ふ双子や秋の空
靴箱の酸っぱき匂ひ運動会
甘藷抱ふ児の両肘の泥塗れ
立冬の空の深さを言ふ子かな
時雨忌の世界へ開く河口かな
七五三すでに鼻筋確かなる
伐られてはならぬ聖樹となるまでは
去年今年胎児は海を抱きたる
熱爛の教師に明日のありにけり
子守唄忘るる頃の海鼠かな
マスクして抱き合ふ子らよ春隣